

地域景観の魅力発信の試み

—飛鳥資料館写真コンテスト—

はじめに 飛鳥資料館では、2001年度に奥飛鳥の景観が重要文化的景観に選定されたことを契機に、写真コンテストを始めた。飛鳥に位置する資料館が、地域の文化財と認識された「文化的景観」を展示にとりこむための試みとして、写真コンテストを開催したのである。

ただし、撮影は重要文化的景観に選定された奥飛鳥に限らず、藤原宮跡や大和三山なども含めたより広い地域を対象としている。明日香村はいわゆる明日香法にもとづいた景観規制があり、村内のいたるところに「まほろばの里」を彷彿とさせる景色が広がっている。先人たちの努力により遺されてきた村内の景観は、国内でも特異な価値をもつものといえる。その魅力を発信することは、地域に根ざした資料館の役割といえるだろう。

このコンテストでは、参加者が飛鳥地域を実際に歩き回り、魅力を発見する、という要素が重要である。展示は館内で完結するものではなく、撮影対象の探索、気象条件や日時を選んでの撮影、そして資料館への応募という、応募者の能動的・自発的な動きを前提としている。いわば飛鳥地域全体をフィールドにした参加型の企画展なのである。応募作は原則全点を企画展で展示する。来館者がお気に入りの一枚を選んで投票し、最多得票者が従一位となる来館者投票も人気がある。第4回までのコンテスト受賞作は作品集『飛鳥』として2013年度に出版した。

飛鳥の葺 2014年度の第5回は、飛鳥の民家や集落景観への視線を呼び起こすことを意図して、「葺」すなわち瓦葺の屋根をテーマとした。明日香村には重要文化財となった岡寺仁王門や書院などの建造物はあるものの、近世・近代の建物の多くは学術的な調査も文化財の指定・登録もされていない。また、村内には近世・近代の民家が現存し、現代の建物も屋根瓦や外装材などの色味が制限されており、一定の秩序ある景観をつくりだしている。このような集落の民家の屋根に葺かれる瓦に注目することで、寺社や遺跡だけではない、飛鳥地域ならではの民家や集落景観の魅力を伝えることも企図した。

歴史的にみても、瓦が日本で初めて葺かれたのは飛鳥の地であった。崇峻天皇元年(588)、百済から渡来した

瓦博士が飛鳥寺の創建に参加し、瓦葺の伽藍が完成する。その後、瓦葺の建物は、飛鳥の寺院や、藤原宮の宮殿などに広まっていく。飛鳥の葺は古代と現代に共通するテーマともいえよう。

即物的なテーマ設定だったため、応募期間の初めはなかなか作品が集まらなかったが、終了間際にたくさんの作品が寄せられた。応募者がテーマにあわせた写真を求めて地域を探索した結果であろう。結果的に、応募点数は213点と過去最高の記録となった。「今回のテーマのために飛鳥の屋根を見直した」「屋根瓦の面白さにきづいた」などの意見が寄せられた。

撮影対象としてもっとも人気を集めたのは、飛鳥寺である。他にも、岡寺・橘寺などの寺院、川原寺跡の遺跡と弘福寺・橘寺を組み合わせた作品もみられた。

一方、担当者が意図した民家・集落の応募も目立った。特に奥飛鳥は撮影対象として人気が高く、栢森にある近世の棧瓦葺の民家は多数の応募作があった。さらに、集落の景観としては、奥飛鳥に加えて、細川や上など、山間の集落も人気を集めた。景色が一望できる傾斜地ならではの立地が魅力的だったようだ。

応募作は、テーマの難しさからか、画面の切り取り方にやや難点があるようなものもあった。画面構成を少し変えるだけでずいぶん引きしまった作品になるものもあり惜しまれた。

正一位の本田和博氏の「穏やかな朝」は、今回のテーマにピッタリと一致した作品であった。落ち着いた色調で、朝霞の中にわずかに光る瓦、左右の瓦の構成と後方の重なり合う山並み、棟の端にさりげなくとまるカラスなど、穏やかな朝の静けさをも感じ取れる作品に仕上がっていた。上位入賞者の作品は、ほぼ共通して「光の捉え方が上手い」といえた。その中で、どんな構図で、どう画面を構成するかが、腕の見せ所であり、受賞の勝敗をわけた。

資料館では、展示にあわせて「飛鳥の葺マップ」を作成し、遺跡・寺院・村内の民家を紹介した。また、撮影対象の種別ごとに、寺院・民家・集落とテーマをつけて写真を展示し、来館者にも、飛鳥の民家や集落の魅力を印象付けるように工夫した。

ひさかたの天一いにしえの飛鳥を想ふ— 2015年度は、キトラ古墳壁画の天文図の特別展が予定されていたた

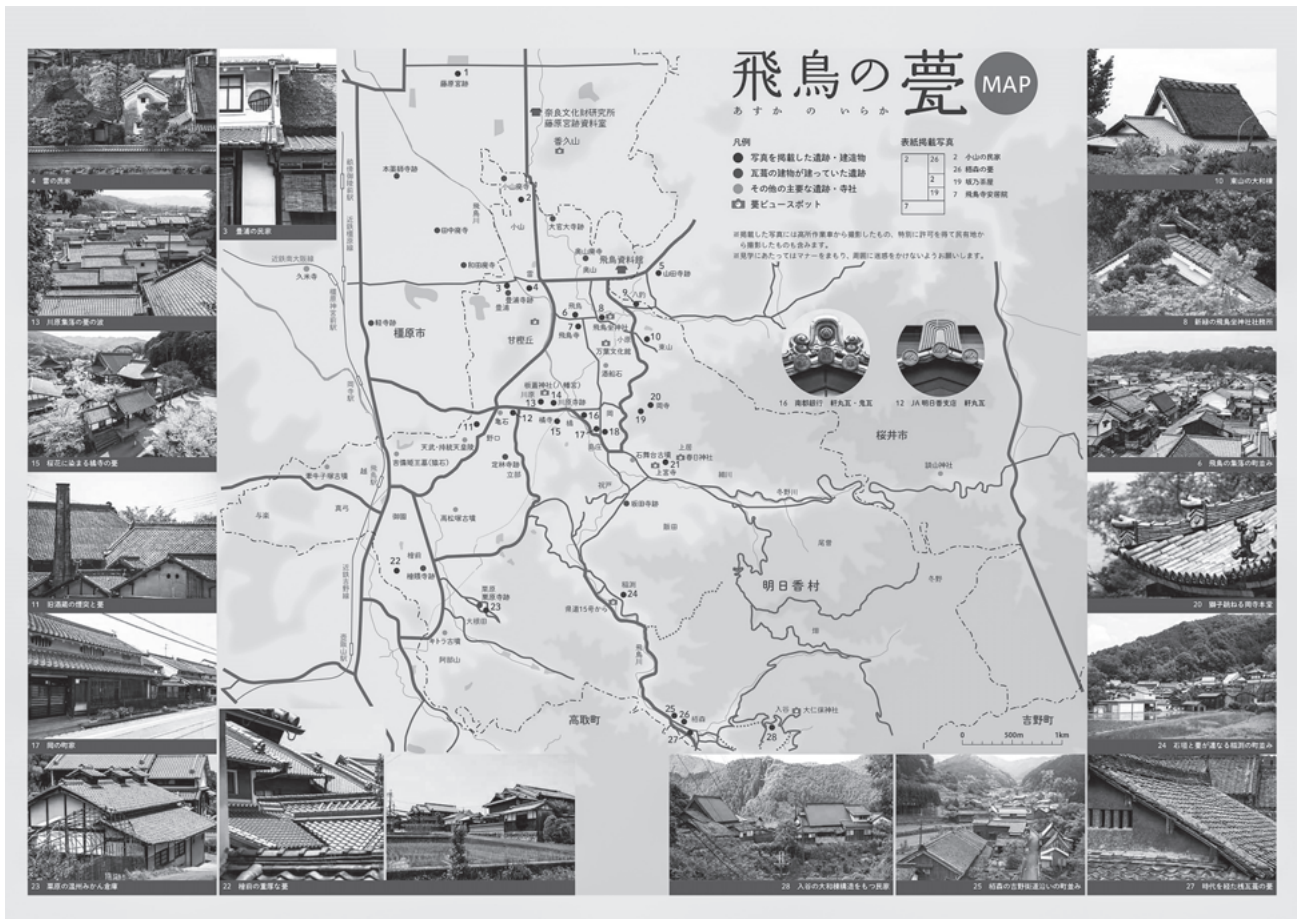


図6 飛鳥の麓マップ

め、第6回のコンテストは、連動させたテーマを設定した。2014年度の夏にテーマを発表し、応募しめ切りまでの時間を長くとした。また、前年度のコンテストで、作品数が多すぎて鑑賞しにくいとの意見がよせられたため、応募点数を一人2点までに制限した。さらに、若年層への誘いとして、近隣の高校や大学の写真部、奈良県高等学校文化連盟写真部会にも積極的に広報活動を展開した。

その結果、応募者数は過去最高の106名にのぼり、10代の参加者も増加した。応募者は最年少が13歳、最年長が81歳とかなり幅のある年齢構成となった。応募点数は181点である。

「天」のテーマから、夕景の写真が応募総数の約3割にのぼった。夕景の空、雲、夕焼け、この組み合わせは、構図は当然のことながら、シャッターチャンスが大きく関係してくる。何度も通い詰めてもなかなか上手くいかない場合があれば、たまたま撮影に赴いた時にすばらしい光景に出会うこともある。撮影する人の「その時の運」にもかなり左右されるテーマ設定だったため、「難しかった」との声もよせられた。

また、今回の応募作の特徴として、シャープな写真が少ないように思われた。夕景が多くシャッタースピードが遅くなっているのが原因なのかもしれない。

デジタル写真の応募が多数を占めたが、注意すべき点として、長時間露光や感度を上げすぎると暗部に出るノイズが確実に画質を落としてしまうことがあげられた。撮影時にも、液晶画面を見ながら両手を伸ばして撮影するのは避けること、ファインダーのあるカメラはファインダーを覗き、脇をしめ腰をやや落として撮影するように心がけること、一眼レフであればミラーアップを使う、三脚を使用する、など手ブレを防止する具体的な方法を、展示パネルや審査講評を通して呼び掛けた。

なかなか見ることができない夜空の星を撮影した写真は人気が高く、来館者投票でも上位を占めた。従三位授賞の「変わらぬ宙」は、撮影された白石博氏の了解のもと、秋期特別展の展示パネルにも使用し、好評を博した。

地域振興のための写真コンテストは全国で開催されているが、当館の写真コンテストは、地域の歴史や文化財への視点を重視した文化財研究所ならではのものである。美しい景色を撮影した写真を募集するだけではなく、その景色に秘められた歴史や文化への「気付き」や「思い」を引き出すことが、文化財研究所が主催する写真コンテストとして意義があると思う。資料館という施設で、「景観」という生きた文化財を固定的に展示するのは難しい。展示室の枠をこえた、地域の文化財の魅力発信の企画として継続していきたい。

(井上直夫・西田紀子)